

受験番号	
------	--

氏名	
----	--



2025年度 東京未来大学入学者選抜試験  
一般選抜【筆記試験型】 C日程(2月25日実施)

# 国語



## 【注意事項】

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験時間は1科目60分です。
- 3 原則として、途中退出は認められません。試験中に気分が悪くなった人や、トイレに行きたくなった人は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 4 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答は、シャープペンシル又は鉛筆で記入してください。
- 6 問題冊子の余白等は適宜利用してもかまいませんが、どのページも切り離してはいけません。
- 7 「やめ」の合図があったら速やかに筆記用具を机の上に置いてください。
- 8 試験終了後、問題冊子、答案用紙はすべて回収します。
- 9 その他、必ず監督者の指示に従ってください。



# I 現代文 一般選抜【筆記試験型】 C日程（2月25日実施）

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

二一世紀もすでに四半世紀が過ぎようとする現在（二〇二四年）、いわゆる人工知能（AI）の情報処理能力は、すさまじい勢いで伸び続けています。このような状況を受けて、シンギュラリティ（技術的特異点）ということばが、話題になることも多くなっています。AIの知能が人間の知能に追いつき、いずれ追い越すだろうという予想のことです。これまで人間がたずさわっていた仕事の現場に多くのAIが導入されていますし、今後、人間の仕事のほとんどがAIに取って代わられるとも言われています。私たちの生活のすみずみにまでAIが入り込む近未来には、人間の生活はいつたどのようなものになるのか想像もつきません。

なかでも、記憶は、AIがもっとも得意とする分野です。AIの場合、どれだけ膨大な量の情報であっても、そのままの形で完璧に蓄えることができます。（①）たとえ何年たっても好きなときにもそのままの形で引き出すことができます。これに対して、人間が覚えることのできる情報量はAIの足もとにも及びません。たとえば、誰もが学校のテストで経験するように、苦勞の末、たとえ何とか暗記できたとしても、テストの翌日にはほとんど忘れてしまっていたのではないのでしょうか。そんな私たち人間とAIの決定的な違いは、私たち人間の記憶力の貧弱さです。たとえば、学校の授業や職場などで同じ話を何人かの人間が聞いた場合、その直後であっても各人が覚えている内容は一人一人バラバラで正確なものが多く、もとの内容とは似つかない形で思い出されたりします。この記憶の正確さが、人間社会の数多くのトラブルのもとになるということには、誰もが思い当たるふしがあります。言うまでもなく、AIにはこのような記憶の正確さといったことは起こり得ません。

このような私たち人間の記憶力の貧弱さから考えれば、記憶についてはすべてAIに任せてしまって、私たち人間は記憶からの解放を目指したくなります。実際、今では誰もがスマートフォン（スマホ）を所有し、うる覚えのことやわからないことはすぐにインターネットで検索して簡単に調べることができます。また、各種イベントの開始時刻や病院の予約時間といった予定なども、スマホに覚えさせることがふつうになりつつあります。さらに、日々の出来事や旅行先での思い出といったものさえ、スマホを使えば写真はもとより動画として正確に記録しておくことも手軽にできるようになっています。それどころか、ライフログという名前知られているように、個人の全人生を完璧な形で記録することすら可能です。ビジネスの現場で業務の外部（<sup>ア</sup>）イタクを意味するアウトソーシングという用語を使うのならば、このような状況は記憶のアウトソーシングと呼ぶことができます。今後、この記憶のアウトソーシングの度合

いがますます加速されていくのは間違いないでしょう。

これまでは、学校のなかであれ職場のなかであれ、少しでも多くの知識を自分の内部に記憶として蓄えることに価値が置かれてきました。そのため、人よりも多くの知識をもった者が、さまざまな場面で有利となり活躍できる場も多かったのではないのでしょうか。けれども、記憶のアウトソーシング社会では、そのような知識の大部分はインターネットをはじめとした（Ⅰ）の世界に蓄えられるようになり、誰もがそれらを自由に利用できるようになるはずです。そうになると、今までのような個人の内部に蓄えられる知識の多い少ないは、もはや価値をもたなくなるように思うかもしれません。

（②）本当にそうなのでしょうか。誰もが記憶のアウトソーシングに依存する社会になれば逆説的に聞こえるかもしれませんが、そのときこそ個人の内部に知識として蓄積された記憶がいつそう重要なものになります。誰もが認める創造性あふれる天才画家であったパブロ・ピカソの有名なことばに、「コンピュータは役に立たない。コンピュータが与えてくれるのは答えだけだ」というのがあります。この「コンピュータ」ということばの代わりに「記憶のアウトソーシング」を入れて、「記憶のアウトソーシングは役に立たない。記憶のアウトソーシングが与えてくれるのは答えだけだ」とすれば、記憶のアウトソーシングだけに（Ⅱ）する問題点が浮き彫りになるのではないのでしょうか。そもそも個人の内部に蓄積される記憶は、個人ごとに量的にも質的にもまったく異なっているものなのです。そして、これらの記憶こそが私たち一人一人の個性を作り上げ、さらには創造性の基礎になります。

ここで改めて書くまでもなく、他人とは異なる思考様式に支えられた創造性の重要性は、芸術や科学の世界だけではなくビジネスや教育の世界でも繰り返し言われ続けてきたことです。けれども、しばしば誤解されるのは創造性がまったく何もないゼロの状態から突如として湧き上がってくるというものです。たとえば、独創的な映画作品を数多く創り出し、世界中の映画界に大きな影響を与えた黒澤明は、次のように創造性の基礎として記憶というものを考えています。すなわち「何もなかったところからものを創り出していると思っているのは、人間の驕りおごだよ。生まれてから今までのどこかで、耳にし、目にした何か、知らず知らずに入り込んだ（Ⅲ）が、何かの切っ掛けで呼び覚まされて動き出す。そうやって、創造していくんだと思うよ」と黒澤は言っているのです。このように、個人の内部に蓄積された記憶と創造性の関係について卓越した創造性を示した一人の人物を引き合いに出すことで、記憶と創造性が密接に関連し合っていることを確認しておきましょう。

一部の専門家以外には、あまり知られていませんが、かつて南方熊楠みなかたたくまぐすという人物がいました。熊楠は時代が幕末から明治に変わる混乱期（一八六七年）に生を受け、日本という国が破局に向かう太平洋戦争開戦の年（一九四一年）にこの世を去りました。（③）文豪と呼ばれる夏目漱石と同年に生まれた熊楠は、一七歳で当時の東京大学予備門に漱石の同期として入学したものの、一年で落第しました。その後は、終生どこの大学に所属することもなくひたすら自分の興味を徹底的に追及しながら、科学界の最高峰の学術英文雑誌で

ある『ネイチャー』に五〇篇あまりの論文を<sup>(イ)</sup>キコウしています。熊楠は日本の民俗学の創始者の一人でもあり、それだけにとどまらず粘菌研究の世界的博物学者でもあり、故郷の自然保護にも努めました。熊楠の痛快かつ破天荒な生き方は、それ自体がとても面白いのですが、ここでは、その超人的な記憶力のエピソードを一つだけ紹介することとします。幼い頃から本を読むのが好きだった熊楠は、一〇歳にもならない頃、今で言う絵入りの百科事典である『和漢三才図会』という書物(全一〇五巻)に強い興味をいだきました。そこで、熊楠は、知人宅にあった『和漢三才図会』を少しづつ読んで暗記し、それを帰宅後に絵も含めて書き記すことを繰り返して、三年で全巻を読破したのです。このエピソードには多少の誇張もあるようですが、自慢の記憶力を<sup>(ウ)</sup>クシして膨大な書物を読んで知識を増やしたのは間違いなさそうです。熊楠は、ほぼ独学で英語、ドイツ語、フランス語はもとよりラテン語、ギリシア語など一〇カ国語近くの言語をマスターし、文字通り古今東西の膨大な書物に目を通し、それらを記憶に蓄え(Ⅳ)を誇りました。そしてこの内部に蓄えられた記憶を意識的・無意識的に活用して、「南方マンガラ」と呼ばれる独自の仏教的世界観を提唱したのです。この熊楠の例からもわかるように、創造性は何も無いところから生まれるのではなく、個人の内部に蓄積された記憶が必要不可欠なのです。

(高橋雅延『記憶の深層―へひらめき―はどこから来るのか』岩波書店より)

□一 文章中の(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナを漢字に直しなさい。なお、漢字は楷書で丁寧書きなさい。

ア イタク      イ キコウ      ウ クシ

□二 文章中の①・②・③に入る最も適当な言葉を、それぞれについて次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア そもそも      イ しかも      ウ およそ      エ まず  
オ いわゆる      カ あえて      キ まるで      ク はたして

□三 文章中の(Ⅰ)・(Ⅱ)・(Ⅲ)に入る最も適当な言葉を、文章中の他の部分から探して、それぞれ漢字二文字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧に書きなさい。

□四 文章中の(Ⅳ)に入る最も適当な言葉を、次から一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 博覧強記      イ 捲土重来      ウ 深謀遠慮

□五 筆者が自説を述べる事例として紹介している三人の人物の氏名を、本文中から抜き出してそのままフルネームで書きなさい。

□六 筆者は「創造性」と「記憶」はどのような関係にあると述べているか。三〇字以上四〇字以内に自分でまとめて答えなさい。(句読点や記号も一文字とする。)

Ⅱ 言語事項・文学史 一般選抜【筆記試験型】 C日程（2月25日実施）

一 次の①～⑤の傍線部分の漢字の読み方を、ひらがなで答えなさい。なお、ひらがなは丁寧書きなさい。

- ① 周囲の羨望を集める。
- ② 任務を完遂する。
- ③ 疑念を払拭できない。
- ④ 故人を悼む気持ち。
- ⑤ 審議会に諮る。

二 次の四字熟語の中の誤字を一字抜き出し、正しい漢字に訂正しなさい。

- ① 金貨玉条（ ） ↓ （ ）
- ② 紅顔無恥（ ） ↓ （ ）
- ③ 棒若無人（ ） ↓ （ ）
- ④ 明鏡紫水（ ） ↓ （ ）
- ⑤ 不益流行（ ） ↓ （ ）

三 次の①～③の問いに答えなさい。

①次のア～カから、石川啄木の作品を二つ選んで、記号で答えなさい。

- |   |      |   |       |   |      |
|---|------|---|-------|---|------|
| ア | 一握の砂 | イ | 智恵子抄  | ウ | 春と修羅 |
| エ | 邪宗門  | オ | 悲しき玩具 | カ | 若菜集  |

②次のア～カから、志賀直哉の作品ではないものを二つ選んで、記号で答えなさい。

- |   |    |   |      |   |        |
|---|----|---|------|---|--------|
| ア | 和解 | イ | 暗夜行路 | ウ | 清兵衛と瓢箪 |
| エ | 明暗 | オ | 網走まで | カ | 或る女    |

③次のア～カから、詩集『のはらうた』の作者を一人選んで、記号で答えなさい。

- |   |      |   |      |   |       |
|---|------|---|------|---|-------|
| ア | 中原中也 | イ | 工藤直子 | ウ | 金子みすゞ |
| エ | 草野心平 | オ | 吉野弘  | カ | 新川和江  |

### Ⅲ 現代文 一般選抜【筆記試験型】 C日程(2月25日実施)

次の文章を読んで、各問いに答えなさい。

近代をどこからと見るかは諸説ありますし、日本について言うなら明治維新以後の西欧文明の移入以降を扱わなければならないのですが、ここで考えたいことは生命・人間・自然・科学・科学技術であり、しかも私のかなり個人的な見方を語ることにありますので、戦後、とくに二〇世紀後半の、分子生物学と呼ばれる新しい生物学が誕生して以降の時代を見ていくことにします。

この時代、私たちが求めてきたものは何よりも、「便利さ」と「豊かさ」だったと言ってよいでしょう。(①)、家の中に入ってきたのが洗濯機、電気冷蔵庫、テレビ(モノクロ)で、三種の神器と言われました。タライを使って子どもたちが汚してきたシャツからシーツまで手洗いしていた女性にとって、スイッチ一つで汚れを落としてくれる洗濯機は夢の道具でした。便利さの象徴です。冷蔵庫も然りです。その後三種の神器は三Cと呼ばれるカラーテレビ、自動車、空調機になりました。便利さは、ぜいたく気分へと移行したのです。

ここで言う「便利さ」「豊かさ」は物が支えてくれるものであり、物を手に入れるためのお金が豊かさの象徴となりました。便利さとは速くできること、手が抜けること、思い通りになることであり、さまざまな電化製品、自動車や新幹線などの交通手段、携帯電話、その他諸々、次々と開発された機器はさらなる便利さをもたらし、それらの製品を生産する産業が活発化することで経済成長、(②)お金の豊かさが手に入りました。私たちはこのような変化を進歩と呼び、そのような社会を近代化した文明社会、つまり先進国の象徴として評価し、この方向での拡大を求めたのです。

しかし「Ⅰ」は生きものであり、「Ⅱ」の中にある」という切り口で見た時、この方向には大きな問題があり、見直さなければなりません。なぜなら、それが生きものとしての特徴と合わないところが多いからです。

速くできる、手が抜ける、思い通りにできる。日常生活の中ではとてもありがたいことですが、困ったことに、これはいずれも生きものには合いません。生きるということは時間を<sup>(ア)</sup>ツムぐことであり、時間を飛ばすことはまったく無意味、むしろ生きることの否定になるからです。

同じように、「手が抜ける」も気になります。(Ⅲ)にかけるという言葉があるように、生きものに向き合う時は、それをよく見つめ相手の思いを汲みとり、求めていると思うことをやってあげられる時にこそ喜びを感じます。野菜づくりを趣味にしている、ある会社の社長さんが、「肥料や水じゃないんだよ。毎朝<sup>(イ)</sup>キゲンはどうかと声をかけてやればおいしいトマトができるんだ」と話す時の

顔は、経営について語る時のそれとは違い、なんとも柔和です。日常は厳しいけれど、その底にはこのような生きものへの眼があるのだと思うと安心します。

しかし戦後の日本社会は、そうした生きものへのまなざしをむしろ切り捨て、圧倒的に、利便さ、効率、自然離れた人工環境をよしとする価値観のもとに「進歩」してきました。そうした価値観のもたらした最たるものの一つが、「東京圏への一極集中」だと思います。この異常とも言える一極集中社会は、生物が生きる場としては、大きな問題を抱えています。生物とは本来「多様」なものであるのに、この社会は均一性を求めるからです。

生物多様性という言葉は環境問題との関連で語られることが多く、人間が環境を「保護する」ために守らなければならないこと、というニュアンスで受けとめられています。生物は本質的に多様であり、人間もその中の一つです。生きものの多様性は、それが暮らす場所との関わりで生まれているわけで、あるところに集中して暮らしたら一様になるのは当然です。東京への一極集中は、生きものとして生きるという生き方を許しません。しかも、多くの発信が東京からなので、社会としての価値観や生き方の選択が東京で決められてしまうこととなります。北海道から沖縄までさまざまな自然の中でそれを生かした暮らしを作っていくことが、「ヒト」としての豊かな暮らしにつながるのに、です。

地球儀の中での日本列島を眺めると、なんと自然に恵まれ、可能性に満ちた場所に私は生まれたのだらうと思います。是非一度眺めてください。北緯四五度から二六度まで、北海道から沖縄までの自然は多様で美しく、資源に満ちています。世界六位の長さと言われる海岸線は、観光資源であると同時に豊かな海産物を提供してくれます。中央には森林で覆われた山脈が並び、富士山は三七七六メートルの高さ、一方日本海溝は最も深い所で八〇二〇メートルの深さ、南北だけでなく高低でも多様な自然を楽しめます。独立した島としての特徴を生かした国づくりを考えると、次々とアイディアが浮かぶ場です。

そんな呑気なことを言っているのは、現代の国際社会において立ち後れてしまうとされるでしょう。もちろん、国際社会の一員であることは重要ですが、グローバルであれと言って、そこで動いている政治や経済のみから生き方を決めていくことのほうが、(③)、後れた考え方だと思います。そうでなく、この列島の「自然」にふさわしい生き方を考えたいので、そこから世界に発信し、世界と交渉し、世界に学び、尊敬される国として存在していくことを考えられる、私たちの国はそんな豊かな地盤を持った国だと思うのです。とくに東日本大震災を体験し、今後も太平洋プレートとの動きは大型の地震の発生を予測させると言われる今、日本列島で上手に暮らしていく方策を考えるなら、生きものであることを実感できる、新しい豊かさを求めていくことが不可欠でしょう。

私は東京で生まれ東京で育ったのですが、この二〇年間大阪に職場を持ち、そこで活動してきました。その中で、一極集中のマイナスを実感したのですが、もっとも強く感じたことは、東京という場の特殊性です。大阪には大阪の人々の暮らしがあり、文化があり

ます。けれどもそこで起きていることはほとんど東京には伝わりません。大阪に異動になった新聞記者の友人は独自の活動を発信すると張り切っていました。数カ月後には東京へ戻りたいと言い始めました。大事と思うことを書いても、全国版にはほとんど採用されないからです。札幌や名古屋や福岡などでも恐らく同じ思いをしている人々がいるのでしよう。日本のどこに暮らしていても東京の情報テレビなどで知らされます。地方にいれば東京と自分の暮らす地域とを見る<sup>(ウ)</sup>。フクガンが持てます。一方、東京の人は東京しか知りません。しかも、それがすべてだと思っています。政治、経済、官庁、マスコミなどの中心がすべて東京にありますから、事はどうしても東京の眼で動きます。

生きものの基本は多様性であり、さまざまな視点があることです。「人間は生きもの」という考え方は、多様性を大事にしますので、さまざまな場にある自然、暮らし、文化が織りなす社会を求めます。その方が一極集中型より柔軟性があり、その結果強い社会になると思います。

日本の近代化は西欧からの科学を主とする知や社会制度の導入で始まったのですが、ヨーロッパなどいわゆる先進国とされる国は実は分散型であり、食べ物の自給もしています。世界のどこであれ、安全で美味しく、良質の食べものを口にしようとするなら、身近で生産するという答になるはずなのです。今後、土地、水などの不足と人口増加、経済成長が重なって食糧不足が心配される中で食べ物づくりの選択を考える時です。少なくともこのままでは、日本は先進国ではないと言わざるを得ません。社会制度や経済の専門家ではないのでこれ以上のことはわかりませんが、生命誌の立場から、一極集中は改めなければならぬと言えます。

(中村桂子『科学者が人間であること』岩波書店より)

□ 文章中の(ア)・(イ)・(ウ)のカタカナを漢字に直しなさい。なお、漢字は楷書で丁寧<sup>ニ</sup>に書きなさい。

ア ツムぐ      イ ごキゲン      ウ フクガン

□ 文章中の①・②・③に入る最も適当な言葉を、それぞれについて次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア もはや      イ 一方      ウ つまり      エ かし  
オ もちろん      カ まず      キ しかも      ク では

□ 文章中の(Ⅰ)・(Ⅱ)に入る最も適当な言葉を、文章中の他の部分から探して、それぞれ漢字二文字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧<sup>ニ</sup>に書きなさい。

□ 文章中の(Ⅲ)に入る最も適当な言葉を自分で考え、漢字二文字で答えなさい。なお、漢字は楷書で丁寧<sup>ニ</sup>に書きなさい。

□ 筆者が文章中で述べている内容と合致しないものを、次から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 日本が近代以降求めてきた「便利さ」「豊かさ」を備えた文明社会は、先進国としてのあるべき姿である。
- イ 物が支える便利さは産業の活性化を図り、その結果、経済的な豊かさにつながった。
- ウ 現在の日本社会は東京への一極集中となっており、この状況は、生き物としての人間の正常な状態ではない。
- エ 日本は多様性に満ちた自然を有しており、その特徴を生かせば新しい豊かさを実現することができる。
- オ 今後のよりよい社会の形成のためには、一極集中よりも分散型の社会を目指すべきである。

問題は以上です。

